

地域を元気にあたたかく。 それが私の使命です。

両沼教会 目黒督朗さん

目黒督朗さんは菓子修業から戻り、和菓子製造卸業「目黒菓子店」を父親から受け継いだ後、昭和54年、「太郎庵」として直営店を開店。今では会津地方に11店舗、社員数150人余と大きく成長させてきた。地元に着した菓子店であるために、地元産の素材にこだわり、創意工夫を怠らない上に、社員一人ひとりが人間的に高まって欲しいと常に願っている。その根底にあるのは、「社長が変われば社員が変わり、会社が変わる」という自覚。繁忙期には、自らも作業現場に立ち、洗浄や片付けを率先して行う。毎年、元旦には、会社のすべてのトイレ掃除を行なうなど、自身の心を磨くと同時に、社員とのふれあいを大切にしている。「太郎庵」のシンボルマークであるランプは、かざせば足元を照らし、寒くなれば暖めてくれる。たとえ遠くは照らせなくても、歩いていく一歩を照らしてくれる——そんなぬくもりもあるふれあいが地域に広がることを願って、目黒さんは今日も会津の里で、お菓子づくりに精をだしている。



心の眼を開く

夫の病気や周囲のひととの軋轢あつれきでつらい日々をすごしていた女性がいました。しかしあるとき、苦しいのは相手のせいではなく、自分が招いたことで、自分を傷つけ迷わせた周囲の言葉はじつはありがたい助言であったのだと気づきます。そしてその瞬間に、「どん底にいた自分に光が差した」という心境になり、うれしくて涙があふれてきたそうです。「心の眼が開く」とはまさにこのような気づきではないかと思うのです。そして、ほんとうに苦しいときこそ、大事なことに気づく契機なのだ。

また、もう一つここで大切なことは、気づきのきっかけはなんであれ、自分にはないものには気がつかないということです。朝、日が昇ると自然に目が覚めるように、素直になれば、それまで気づけなかったことにも自然に目が向きます。それが感動や共鳴はもちろん、人生観の転換にさえつながるわけで、いずれもみな、ふれる縁に触発されて自分にあるものがめざめたといえるのです。

立正佼成会